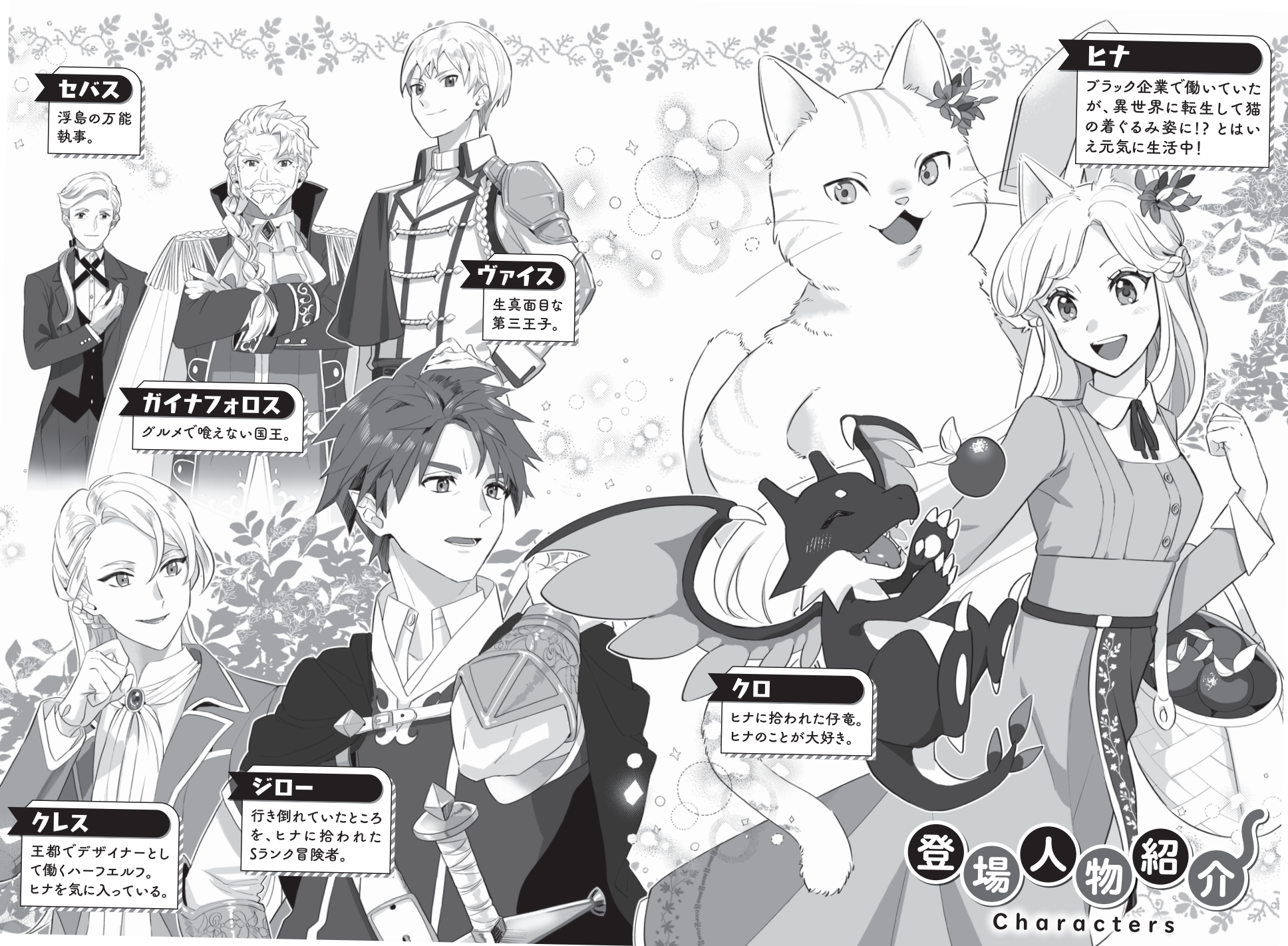
# 異世界着ぐるみ転生


セバス
浮島の万能執事。
ヴァイス
生真面目な第三王子。
ガイナフォロス
グルメで喰えない国王。
ヒナ
ブラック企業で働いていたが、異世界に転生して猫の着ぐるみ姿に!? とはいえ元気に生活中!
クロ
ヒナに拾われた仔竜。ヒナのことが大好き。
ジロー
行き倒れていたところを、ヒナに拾われたSランク冒険者。
クレス
王都でデザイナーとして働くハーフエルフ。ヒナを気に入っている。
登場人物紹介
Characters

# プロローグ　にゃんパニック

「う……ん……」

瞼を開くと、抜けるような青空に目が眩んだ。

「カーテン閉め忘れた……？　はい？」

なぜか重たい身体で立ち上がって周りを見る。見渡す限りは森だった。

頬を撫でる風。木々と土の香り。野外！　いやいや、ちょっと待て。カーテンを閉め忘れたとか、どうやらそんな話ではない。ええと昨日は会社から帰って、ご飯食べて、お風呂入って……ああ、日課のオンラインゲームを……そこからの記憶がない。

夕飯の献立は思い出せるのに、ゲームを起動させた後のことがまったく思い出せない。

それに、手元が何だか暖かくて柔らかい。この感触が思考を鈍らせている。

「さっきから、なんだこのモフモフは。気持ちいいじゃない……か……」

自分の手を見ると、モフモフとした薄桃色の毛が！

「ふぁ!?」

ぷにっとした肉球に鋭い爪！　自分の顔を触ってみると、モフッとした感触。慌てて下を見ると、

ふっくらとした胴回りに、短めのあんよが……ちょっと待て。これ、見覚えがあるぞ？

「これ、私のアバターでは？」

オンラインゲームで使っていた薄桃色のマンチカン！　着ぐるみっぽい見た目だけど、猫好きの私は即決でした。とはいえ、それはゲームの画面の中だけの話のはずで――

「ってことは夢？」

そうだ、夢だ。夢には寝る前に見た物が反映されると聞いたことがある。きっと、ゲーム画面を開いたまま寝落ちしてしまったに違いない。

うん、夢ならば、楽しもう。

「装備は……ああ、ちゃんとあった」

さくっと割り切って、ゲームならばあるはずの物を探ると、モフモフとした毛に隠れていたウエストポーチはしっかりと私に装備されていた。

かの有名なアイテムバッグです！　無限に物が収納可能かつ時間経過なしで劣化や腐敗の心配なし！　大変に便利なそれをモフモフの手でそっと撫でる。

「作るの大変だったんだよねぇ。はてさて、中身は……うん、ちゃんとある。ん？」

食料や素材、その他諸々、手当たり次第に入れていた物は確かにプレイした記憶にあるが、一つだけ見覚えのない物があった。

「手紙？」

アイテムバッグから取り出して、開いてみる。すると、とんでもないことが書いてあった。

『彩花（さいか）　陽菜（ひな）殿

これを読んでいるということは、無事、あなたは異世界に転生されたのだと思います。
ぶっちゃけちょっと心配だったけど、結果オーライってことで。
もしかしたら夢だと思っているかもしれないけど、きっちりはっきり現実なので、受け止めてね！
なぜとかどうして私が!?　とかいう質問は一切受け付けませんので、悪しからず。
まぁ、神の気まぐれって感じで、諦めて☆
使命とか、神の天啓とかないから安心してね！
でも、ゲーム内のスキルとか色々は、そのまま使えるから！
そんじゃ、良い人生を～。
追伸：この手紙は、読み終わると爆発――』
「うわぁ!?」
物騒な文章に、思わず手紙を放り投げて後ずさる。が、いつまで経っても何も起こらない。
恐る恐る手紙を拾い上げて、最後の文をまじまじと見つめる。
『追伸：この手紙は、読み終わると爆発しないぴょ～ん！　女神より』
「『火炎』」
思わず唱えた魔法が、手紙を灰になるまで燃やし尽くした。
「あ、本当にスキルは使えるんだ……じゃなくて、おぉふ……なんてこったい」



夢じゃなくて異世界？　転生？　女神ってなんなのさ！　彩花陽菜殿って書いてあったから、さっきの手紙は私宛で間違いないんだろうけど……こんな猫の姿で異世界に転生って本気!?
「現実……だとしたら」
慌てて現状について確認する。アイテムバッグはさっき使えた。手紙にあったスキルとか『色々』ってなんだ？　ゲームの設定を思い出せ！
私がプレイしていたオンラインゲームは、戦闘あり、料理あり、農業ありのなんでもこいな本格ＲＰＧ。それに私がゲーム内で持っていた称号は、「獣騎士」「料理人」「調合師」「豪農」「魔導士」「治癒師」「大工」「裁縫師」だったはず。
十年近くやり込んでたから、完全にゲーム内だとしたらやれることは多い。ただ……
「いや、待て。この外見で進めなきゃってことだよね？　獣人ってこと？」
このゲーム内の獣人は、ナイスバディな男性や女性に動物の耳だけ生えている姿と今の私のようなもふもふの着ぐるみ姿の二種類があった。もふもふの着ぐるみを選んだことに後悔はなかったけど、それはあくまでゲーム内の話だ。
「この状態で人前に出て大丈夫なのかな？」
もしもこの世界が獣人差別の強い世界だったら？　捕まって、奴隷なんて……ひぃ！
最悪、魔物だ！　とか言って素材にされるかもしれない。
ぞっとして慌てて辺りを見渡してみたが、森と森と森、人の気配は幸いない。
「使命も何もないって手紙には書いてあったし、このまま森の中でひっそりと暮らす？」

ゲーム内で使っていた農具や種、苗等も鞄の中に入っている。森で自給自足する猫。なんともファンシーで和みそうじゃないか。それでもいいかもしれない、と若干日和った考えが脳裏をよぎった時だった。

「キャー！」

女の子の悲鳴が聞こえてきちゃいました。

「……マジか」

視線を巡らせて、とりあえず、スキル『千里眼』を発動……おお、ちゃんと出来た。って、うわぁ、酔いそう。遠くにあるはずの景色がグッと目の前に広がると、ゲームでは感じなかった違和感が凄い！　うぷっ。いかん。酔っている場合じゃなかった。

目の奥に力を入れるようにして、声の聞こえた場所を探す。すると少し離れた場所で、盗賊らしき集団に馬車が襲われていた。剣を持った男達、そして、彼らに追い詰められている中年男性と小さな女の子がいる。

警察に電話……は無理だ。

プルプルと身体が震える。一般市民ですよ？　本物の剣を持った人なんて今まで見たことがない。

「じゃあ見て見ぬふり……なんて、出来るかボケェ！」

恐怖心を振り切るように地面を蹴り、走り出す。木々の間をすり抜け、勢いのまま跳んだ。

「とう！」

「ぎゃっ!?」



「な、何だ!?」

盗賊（多分）の顔に肉球キックがクリーンヒット！　足の裏に、ぶにっとした嫌な感触がした。

吹っ飛ばされた男が木に当たって気絶。勢いで来ちゃったけど意外と、行けるかも？

「猫？　いや、獣魔か？」

飛ばされた男の仲間は困惑しているみたいで、こちらに剣を向けながら眉をひそめている。

まぁ、でしょうね。突然巨大な猫が割って入ってきたんだもの。う～ん、威嚇でもしてみるか？

「フ～～～ウ～」

「うっ！」

ちょっと効いてるかも。それに男達は、剣や防具を身に着けてはいるが、どれもボロボロだ。服も汚れているし……臭そう。いかにも盗賊！　って感じだ。

さて、どうやって追い払おうか？　猫の喧嘩って、確か毛を逆立てて威嚇。爪を出して、猫パンチだっけ。自分の顔がどんな感じなのか分からないけど、とりあえず今の感覚で出来るだけ怖い顔を作り、手を前に構えてみる。

「シャー！」

「く、くそ、バケモンだ！　退け！」

あれぇ？

盗賊（多分）の男達は、脱兎の如く逃げていった。失礼な。

「ひっひぃぃ！」

「パパ……！」
「食べるなら、私を！　む、娘は」
それどころか助けたはずの親子にも怖がられた！　若干ショックだが手を下げて、二人と目線を合わせるように屈み込む。
「いや、食べませんよ？」
「喋った!?」
「あっ言葉通じた!?」
驚く親子に慌てて手を振って、出来るだけ怖く見えないように身体を縮める。
「え、え～っと、私の名前は……ヒナ」
咄嗟に出てきたのは、ゲーム内での名前だった。まぁ、本名をカタカナにしただけだから、違和感はないけど。必死に考えながら自己紹介をするようにモフモフの手を胸に置く。
「獣人の、ヒナです。その、旅をしていて」
おおお、怪しぃ！　自分でも怪しいと思う！　でっかい喋る猫が旅って！
でも流石に異世界から来ましたとは、言えない。余計怪しまれてしまいそうだ。祈るような気持ちで親子を見つめると、なんだかぽかんと口を開いていた。
「獣……人？」
めっちゃ疑問符付いてる！　パパさんの顔にも「何言ってんだこいつ？」って書いてあるみたいで、胃が痛む。しかし、数瞬おいてパパさんの顔はぱあっと明るくなった。



「よ、良かったぁ～！　私はてっきり、魔獣かと。いや、失礼。助けていただいてありがとうございました！」
おや、セーフ？　獣人はセーフ？　頭を下げたパパさんにありがとう！　と言おうとした時だった。
「うっ、痛たた」
パパさんが腕を押さえてへたり込む。よく見ると左腕が血まみれで、パックリと切れている。さっきの盗賊にやられたんだろう。
「ちょっと見せてください」
「え？　ああ、少し切られただけで……え？」
傷口を押さえたパパさんの手をどかしてもらって、右手をかざす。それから「『治癒』」と唱えると、見る見るうちに傷が塞がっていった。よかった。魔導士の『火炎』スキルが使えたから、治癒師の『治癒』も使えると思ったんだよね。ほっとして微笑むと、ぎゅっと足元に何かがくっついた。
下を見ると娘さんが私の身体に抱き付いている。
「ありがとう、ネコさん！」
「どういたしまして。お嬢ちゃんは怪我してない？」
「うん！」
「よく頑張ったね」
頭を撫でてやると、女の子の目に涙が溜まり、ポロポロと泣き出してしまった。

「うん……ふ、ふえぇぇぇ！　怖かったのぉ！　パパが、し、しんじゃ……ふぇぇ！」
「おぉぉ。も、もう大丈夫だから！　ね！」
女の子を抱き上げると、そのまま首に抱き付かれる。安心させるように背中をポンポンと優しく叩く。しばらくそうしていると、女の子は泣き疲れて眠ってしまった。
パパさんがなんともいえない顔でこちらを見ている。
「……すみません」
「大丈夫ですよ」
このモフモフですから！　気持ちは凄く分かる！
女の子をそっとパパさんに返そうとしたが、私の毛を両手でしっかりと握りしめて離さない。ちょっと困っているとパパさんがハッと顔を上げた。
「あの、お礼もしたいですし、よかったらそのままでいてやってくれませんか？　馬も無事ですし、是非家に来てください」
「いいんですか!?　……分かりました。お言葉に甘えさせてもらいます」
獣人、って言って安心されたぐらいだから、もしかしてこの世界ではこの姿も普通なのかもしれない。この世界の情報も欲しいしね。
女の子を起こさないように馬車に乗せてもらうと、パパさんが操る馬車がゆっくりと動き出した。
それからパパさんと色々な話をした。
パパさんの名前はメルさん。そして、女の子はキャルちゃんというらしい。



二人は町へ農作物を売りに行った帰りだったそうだ。
「護衛に冒険者を雇えばよかったんでしょうが、うちみたいな小さな村には来たがらないんで」
「冒険者、ですか」
「ヒナさんは旅の途中でしたよね」
「え、ええ」
「獣人は戦闘向きで魔法は得意ではないと聞きますが、噂なんてあてにならんもんですね」
「え、そうなんですか？」
つい聞いちゃった！　ゲームでは複数の職業を持つプレイヤーは少なくなかった。思わず出た言葉にパパさんが怪訝そうにこっちを見る。私は慌てて誤魔化すように言った。
「え、えっと！　私、他の獣人に会ったことがなくて」
「……そうでしたか。あの戦争から三百年。未だ多くの獣人が森や山の奥に潜んで暮らしていると聞きます。同じ人間として、申し訳ない」
すると、思いがけず沈鬱な声が返ってきた。三百年前の戦争ってなんのことだろう？
「奴隷制度が改定され、多くの獣人が解放されたものの、人との共存を拒む獣人が多く、人里にいる獣人のほとんどが一人で活動出来る冒険者だと聞きます」
奴隷！　改定ってことは、今も奴隷制度はあるってことだよね。そうすると、やっぱりこの人に出会えてラッキーだったな……もしかしたら、私も捕まっていたかもしれないんだ。
しみじみとそんなことを考えていると、メルさんがハッと顔を上げた。

「おっと、申し訳ない！　こんな話を」
「いいえ。気にしないでください」
その戦争を知らない私がそんなことを言っていいのか迷ったけど、それしか言葉が見つからなかった。メルさんの顔は今にも泣きそうだったのだ。
「少しずつでも分かり合えたらと私は思っているのですよ。……おっと、村が見えてきました」
前を見ると、木製の低い柵に囲まれた可愛らしい村が見えた。確かに小さそうだけど、温かい雰囲気だ。じっとその明かりを見つめていると、キャルちゃんが私の首元で身じろいだ。
「う……ん」
「キャルちゃん、お家が見えたって」
そう言うと、彼女はパッと起き上がって目をキラキラと輝かせた。
村への入り口らしき所に女の人が立っている。あれがママらしい。馬車がたどり着くと、キャルちゃんが馬車からぴょんと飛び降りた。
「ママ！」
「お帰りなさい、キャル」
「あのね、ネコさんがたすけてくれたの！　パパのいたいのもなおしてくれたの！」
「え？」
うう、出ていかないと駄目だよね。
馬車から降りて顔を出すと、ママさんの顔が一瞬固まり、キャルちゃんをギュッと抱きしめた。



怖いよね、そうだよね。出来るだけ身体を縮めると、メルさんが慌てたように馬車を降りた。
「レイナ、こちらはヒナさんという方だ。盗賊に襲われたところを助けていただいたんだよ」
「盗賊!?　それは、ありがとうございました！」
「い、いえ、大したことはしていないので」
慌てて頭を下げたママさんに、私も慌てて頭を下げた。
「ねぇ、ママ。ネコさん、おうちにきてもいいでしょ？」
「もちろん。主人と娘の命の恩人ですもの！」
「やったぁ！　ネコさん、だっこ！」
「こら、キャル！」
困った顔のママさんに大丈夫ですよと伝え、キャルちゃんを抱き上げた。
三歳くらいだろうか？　前の私だったらちょっと自信がない重さだったけど、この身体のお陰かキャルちゃんが羽のように軽く感じる。そのままママさんについて村の中を歩いていく。
風が心地いい。きっと平和な村なんだろうなぁ……
「ふふふ。ネコさんフワフワ！　でも、キャルのせいでちょっとかたいの。ごめんなさい」
ああ、キャルちゃんの涙やヨダレでゴワゴワな部分が出来てしまったようだ。
「大丈夫だよ。『クリーン』。ほら、これでサラサラでしょう？」
洗浄スキルを使って綺麗にしてみた。ゲームには珍しく、汚れのパラメータがあったから必須だったんだよね。今はそのパラメータも見えないけど。覚えておいてよかった！

「すごい！　キャルもきれいになったの！」
そんなことを話していると、凄い視線を感じる！　……と思ったら、村の人達だ。嫌な感じはしないけど、ちょっと警戒されているようだ。
「わぁ！　おっきなネコさんだぁ！」
するといつの間にか、数人の子供に囲まれていた。
「キャルのおともだちなの！」
「いいなぁ！」
「私も！　おともだちになりたい！」
おおう、モテモテ！　一人ずつ頭を撫でてあげると、キャッキャと喜ぶ子供たち。子供って、こんなに可愛いんだなぁ。
「ヒナって言うの。よろしくね」
そう言うと、子供たちはポカンとした顔をして、それからまた私にぎゅっと抱き付いてくれた。
「しゃべったぁ！」
「しゃべるネコさんだ！」
一瞬ドキッとしたけどよかった！　結局、ハーメルンの笛吹き男みたいにぞろぞろと子供たちを引き連れ、村の真ん中まで歩いていく。すると、あちこちから「ご飯よ～！」と声がかかり、子供たちは「またね！」と言って散っていった。なんか、いいな。こういう雰囲気。
そこからもう少し歩くと、畑が広がっていた。



「キャルのおうちは、あれ！」
小高い丘の上に、絵本に出てきそうな可愛い家が建っていた。
すべてが茜色に染まり、優しい。こんな光景、見たことない。
私の日常は、仕事に追われ、くたくたになって帰り、食べて寝るだけだった。そんな生活が嫌になっても、生きていくためには仕方がないと割り切っていた。
おばあちゃん家を思い出し、少しだけ景色が滲んだ。向こうの世界に未練がないわけじゃない。だが、幼い頃に両親を亡くした私を引き取り、育ててくれた祖母も数年前に他界した。親しい親類縁者もいない。親戚といえば、一年に一度すら顔を見せなかったくせに、祖母が亡くなった途端、住んでいた家をさっさと売ったような奴等しかいない。
「異世界か……」
「い？」
「なんでもないよ」
地面に降ろすと、軽やかに走り出すキャルちゃん。その光景が幼い頃の自分に重なった。
風に混じる土と緑の香り。畑も野山も自分の庭だった。祖母が亡くなってすぐに家を追い出され、勤め先に近い街中に部屋を借りた。最初は全然慣れず、何度か身体も壊した。
お金を貯めて、田舎に小さな家を買おう。そんな夢を抱いていた頃もあった。
それでゲーム内で農業を極めていたわけで……
だからこうなった今、異世界でスローライフ……うん、いいかもね。

# 第一章　猫暮らし、始めます

「ふぁ……あ」

目が覚めると、知らない天井が見えた。異世界に来て二日目。昨日はキャルちゃんの家で晩御飯をご馳走になり、そのまま泊まらせてもらった。

「ネコさ～ん！」

「おはよう、キャルちゃん」

「おはよう！　ご飯だって！」

おやまぁ。随分と寝てしまったようだ。キャルちゃんに連れられて一階に下りると、美味しそうな匂いが鼻をくすぐる。

「おはよう、ヒナさん。よく眠れたかい？」

「おはようございます。お陰様で、ぐっすり眠れました」

朝ご飯は、スープとパン、ベーコンエッグにサラダか。美味しそう！

「それで、考えていただけました？」

「はい。是非、この村でお世話になりたいと思います」

昨日、メルさんにこの村に住んではどうかと提案された。

リアル生活で冒険者をやるつもりもなかったし、この村の雰囲気も好きになった。

この世界を見てみたい気もするけど、獣人への差別は少なからずあるようだし、安定した生活、大事！

「そうですか！　それはよかった！」

「良かったわね、キャル」

「うん！」

朝食後、村長さんのところへ連れていってもらえることになった。

外へ出ると、早朝の空気が美味しい！　ゴミを漁るカラスもいない。酔いつぶれて転がっているオジサンもいない。高い建物に遮られることのない朝日が、村中を照らしていた。

ゲームの中の世界は隈なく回ったはずだが、こんな村は存在しなかったような気がする。アバターで転生したが、ゲームの中の世界というわけではなさそうだ。

村の中心にある村長さんの家に行くと、小さな老人が出迎えてくれた。

「おやおや、獣人とは珍しいのぉ」

「初めまして。ヒナといいます」

「話はメルから聞いておるよ。さぁ、中へ」

身体を縮めて家の中へと入る。昨日も思ったけど、出入り口が小さい。いや、私が大きいのか。

今の私はメルさんよりも頭一つ大きい。元々あまり背が高い方ではなかったので、昨日も何度か額を打った。

勧められた椅子に座ろうとしたら、椅子がミシリと悲鳴を上げた。このまま座ると壊れそうなので、床に座らせてもらう。

「この村に住んでくださるということだったかね？」

「はい！　そうです。それと……よろしいのでしたら、あの、自分で家を作りたいのですが」

「自分で!?」

私の言葉に村長さんが目を見開いた。それに必死で頷く。この村の家は可愛い。だが、サイズも可愛い！　メルさん家のベッドだって、今の私には正直小さかったのだ。

「はい。その、この身体ですし。それで、畑もやりたいので広めの土地を……ああ、お金なら少しは」

「いやいや。金は必要ない。領主様から、開拓した土地は好きに使うようにと言われておるで。それなら……場所はどこがいいかの」

村長さんはしばらく考えてからそう言った。するとメルさんが膝を打つ。

「村長、あそこはどうです？　ほら、三年前までヘム婆さんが住んでいた」

それから話はとんとん拍子で進んで、メルさんのいう土地に案内された……しかし。

「ここはヘム婆さんが住んでたんだが、年も年だし、町に住んでる息子さんのところに移ったんだ。ここなら俺達の家からも近いし、何かあればすっ飛んでこれる……と思ったんだが……まさか家ごとなくなってるとは」

申し訳なさそうなメルさんの視線が、すっからかんの地面に向く。



本来は木造の平屋が建っていたらしいが、人が住まなくなって三年。元々ボロボロだったのが、昨年の大嵐で吹っ飛んだそうだ。しかし、私にとっては好都合でさえある。

「あ、ああ。大丈夫です！　ちゃちゃっと建てますので」

「ちゃちゃっと？」

「はい」

ちょっと離れててくださいね、と言って、アイテムバッグから材料を取り出していく。

いつか理想の家を建てたくて、コツコツと集めておいたんだよね！　偉いぞ、自分！

ここからは称号「大工」の出番だ。頭の中に設計図を描くと、後は身体が動いてくれる。

――そして数時間後。

「出来たぁ！」

じゃじゃ～ん。

見事な新築古民家？　……風な家が出来上がりました。イメージは、私が昔住んでいたお婆ちゃんの家――平屋の日本家屋だ。玄関の扉を開けると、カラカラと小気味良い音が響く。

広めの土間が玄関になっていて右手には土間続きの台所に、土から拘って作った、薪の竈。

ゲーム内では便利なシステムキッチンもあったけど、この世界には電気も水道もないようなのでやめた。

他にはタイル張りで、この身体でも余裕で入れるほどの大きめなお風呂……そして畳がある。

「井草の栽培、頑張ってよかったぁ！」

日本家屋と言ったらやっぱり畳だろう。コロコロと転がると、井草がふわっと香った。
その時だった。
「なんじゃこりゃぁ!?」
「ふぇ？　痛い!?」
突然聞こえた声に驚いて、ちゃぶ台の脚に弁慶も泣いてしまうところを打ち付けてしまう。転げ回っていると、入口のところで呆然としているメルさんを見つけてしまった。
「うう……あぁ、メルさん」
「ヒナさん？　これ、さっきまでなかったですよね!?」
「あ、はい。頑張りましたぁ。よかったら上がってってください。お茶淹れますから！」
座布団を出して、座るように勧める。
早速新しい台所でお茶を淹れて戻ると、メルさんはキョロキョロと家の中を見回していた。
「ヒナさんはもしかして、凄い魔法使いなのでは……？」
「へ？　いや、ただの猫ですよ」
「ただの猫って……」
異世界人で獣人だけど。まだ言えていない秘密を呟いて、私はまあまあと茶菓子を勧めた。



## ○ヴァイスとの出会い

さて、家を建ててから数日が経った。庭の畑はようやく形になりつつある。
「順調、順調」
ゲーム仕様のファンタジー食材の苗が根付いたのには驚いたけど、無事に芽吹いたので一安心だ。
「ふんふ～ん♪」
雑草を抜きながら、鼻歌も出る。
この着ぐるみ専用、農作業セット。作っておいてよかった！　麦わら帽子、アームカバー、軍手、長靴、エプロンの、五点セットだ。そして、雑草取りには欠かせない、コロコロ車輪付き道具入れ！　座りながら移動出来る、優れものです。
ゲームの中ではネタ道具だったけど、今となってはかなり役に立つ。
雑草を束ねて身体を起こすと、家の向かいから声がする。
「ヒナさ～ん！」
「ん？　ああ、メルさん！」
最初はこの家に驚いていたようだったけど、今ではメルさんもすっかりなじんでいる。今日もわざわざここまで来てくれたようでありがたい。回覧板などない小さな村なので、連絡事項などがあ

ると人力なのだ。
こんな辺鄙なところまでわざわざ来てくれたのはありがたいけど大変だろう。
その内、自転車とか作ろうかなと考えながら聞いてみる。
「何かありました？」
「実は、しばらく村に騎士団が逗留することになったんですよ。ほら、例の盗賊討伐のためです」
「ああ、そういえばあの時逃がしちゃいましたもんね私……」
メルさん達を襲っていた盗賊団の討伐が目的なのか。それにしても……
「騎士団、ねぇ」
帰っていくメルさんに手を振りながら呟く。なにせでっかい猫の身だから、怪しまれてしまったらとても悲しい。
「まぁ、こんな村の外れまでは来ないでしょ」
基本的には引きこもっておこう。まだまだ畑とかおうちのリフォームも終わってないしね！

「ん？」
そう決意した数日後、畑の世話をしていると、村の中心の方から賑やかな声が聞こえてきた。
「騎士団が来たのかな」
様子は気になるけど、見にいくにはこの家はちょっと遠い。そこでちょっぴり横着することにして、『千里眼』のスキルを使った。

「西洋鎧……あれが騎士団かぁ」
十人近くいるだろうか。馬に乗っている人間が五人と馬車が二台。絢爛豪華な騎士たちの装備は、この村では少々浮いて見える。
「あの人がリーダーだな」
その中でも一際目立つ人間が一人いた。金髪碧眼。絵に描いたような美青年が村長さんと話をしている。まあ私には何の関係もないのだが物珍しさで彼をじっと見つめてしまう。
「え？」
その時だった。青年と一瞬目が合った気がして首を傾げる。
「いやいや、気のせいだよねぇ」
村の中心部にある建物さえ、ここからは爪楊枝の頭ほどの大きさに見える。
きっと、少し頭を上げたとか、天気の話をしていたのだろう。
「さぁ、水撒きしよっと」
魔法で水の球を出し、一畝ずつ雨を降らせるように水を撒いていく。便利だなぁ。
その内、田んぼも作りたい。お米の備蓄はあるが、一生分というほどではない。
「目標、自給自足！」
そんなことを思いながらしばらく作業を続けた。休憩しようと縁側でお茶を啜っていると、人が歩いてきた。
メルさんかな？　と思ったが、彼にしては背が高い。って、あの美青年じゃん！

うわぁ、どうしよう!?　隠れる？　いや、何も悪いことはしていないし！
「やぁ」
来ちゃった！　落ち着け、別に隠れる必要はない。目の前に現れた金髪碧眼の姿に目を逸らしつつ、頭を下げる。急いで座布団を出して、縁側に置いた。
「あの、粗茶ですが……」
ああああ、湯呑で出しちゃった。ここにはメルさんやキャルちゃんが遊びにくることがあるので、縁側でお茶を飲めるよう湯呑を多めに用意してあるのだ。
彼は差し出された湯呑に一瞬目を瞠り、それから手に取った。
「ありがとう。うん……初めてだが、美味しい」
よかった……ってか、この人何しに来たの!?　思わずジトッとした目で彼を見る。
しかし、にっこり微笑まれてしまった。
「そう警戒しなくてもいい。君のことは村長から聞いているよ。私の名はヴァイス。盗賊団討伐を任された騎士団の一員だ」
「ヒナ、です」
騎士団の一員ね。どう見てもただの騎士というより団長さんって感じだったけど……うーん。
私が警戒しっぱなしなのが分かったのか、彼は苦笑したまま言葉を続ける。
「この村には数日滞在する予定だが……ここは、いい村だね」
それは、心から言っているように見えた。



金色の髪が風に揺れている姿に、思わず見惚れてしまいそうになる。
私は思わずその言葉に大きく頷いてしまった。
「はい、とても。とても、いい村です」
「ふふ。お茶、ご馳走様。また、来てもいいかな？」
「は、はい」
また慌てて頷くと、「ありがとう」と言って、ヴァイスは村へと戻っていった。
本当に、何しに来たんだろう？
そして次の日から、ヴァイスは日に一度はここへ来るようになった。
縁側でお茶を飲み、少し話をしては帰る。畑では何を育てているのか、家の作りはどうとか、他愛もないことを話す。そんな日が続く内にだんだん彼と緊張せずに話せるようになっていった。
「これ、美味いな」
「ああ、それはおにぎりって言って、梅干しが入っているからすっぱ……遅かったか」
今日は、縁側でお昼ご飯を一緒に食べている。
きゅっと顔をしかめて涙目になる美青年。いやぁ、絵になるね。
ヴァイスは唇を舐めてから、こくこくと頷いた。
「かなりすっぱいが、美味しい。食欲の落ちる夏にいいかもしれないな。それに……よい気付け薬にもなりそうだ」

「気付け薬？」
「気絶した者の口にこう」
「やめてあげて!?」
帰り際、小さな壺に梅干しを入れて渡したら、喜んで帰っていった。
最初は警戒していたけど、いい人なのかもしれない。そんな風に思いながら彼の背中を見送った。

○宿舎の中で（ヴァイス視点）

「今戻った」
宿舎に戻ると、ひりりとした緊張感が漂っていた。騎士団としてこの村に滞在して数日が経つが、盗賊は未だに見つかっていない。そのことへの苛立ちもあるのだろう。
自分に割り振られた部屋に向かっていると、見慣れた騎士――ライルが俺の前で頭を下げた。
「お帰りなさいませ、ヴァイス殿下」
「殿下はよしてくれ、隊長でいい」
「また、あの獣人のところへ行っておられたのですか」
少しトゲのある言葉に、思わず口角が上がる。
「まだ警戒しているのか。ヒナは無害だと言っただろう」

「しかし……このような辺境の村に、あのような獣人がいれば警戒もします。もう少し自分のお立場を」
「まぁ、確かに異色ではあるが」
俺は顎を指でなぞって、ヒナのことを考えた。
獣人であるヒナ。だが、彼女は私が今まで見てきた獣人とは異なる姿をしている。本来獣人とは、人族とほとんど姿が変わらない種族だ。人族と違うのは、獣の耳と尾、それから優れた身体能力。それに総じて見目がいいことから、愛玩奴隷として使われていた過去がある。
しかしヒナは、猫がそのまま巨大化したような姿をしている。手足も短く、ぽってりとした胴は、とても戦闘に向いているとは思えない。
どちらかといえば魔獣のようだと評する部下の気持ちが分からないわけではない。
ライルはさらに続ける。
「私達が村へ来た日の強い魔力。あそこまでの魔力量は、貴族でも稀です。それをこんなところにいる獣人が持っているなんて……」
「確かに、魔力の量は多いだろうな」
本人に自覚があるかは分からない。しかし、村に俺たちが入った瞬間に感じた強い魔力はヒナのものだった。
「そういえば、あの家はヒナが建てたそうだよ」
「自分で、ですか。あの独特な建築を見ると、彼女は東にあるヒノモト国の出身でしょうか？」

東にある島国、ヒノモト国。独特な文化を持ち、多様な種族が共存していると本で読んだことがある。奴隷狩りから逃れ、海を渡った獣人も少なくない。

「かもしれないな。そういえばライル、これが何か分かるか？」

ヒナに渡された壺をライルに見せると、不思議そうに手に取った。

口に入れろ、と中の赤い実を指さしてやると、ライルは素直に口に放り込んだ。

「失礼します。うっ……これは、気付け薬ですか？」

「ふ、あははは。違うよ。ウメボシと言うそうだ。かなり酸味が強いが、美味いぞ」

「食べるのですか、これを」

「コメと一緒に食べるそうだ」

「隊長、宿舎以外で食べ物を口にするのは控えてください。毒でも入っていたら」

「そこらの毒など、とうに効かないさ。それに、毒を盛られたならすぐに分かる」

「ですが、お立場というものが……」

「ライル」

名を呼ぶと、ライルはそれ以上言葉を続けることはしなかった。

それを見て、小さく頷く。

「もうすぐ盗賊団の調査も終わる。それまでは……束の間の自由を満喫するよ」

そう、束の間だ。王位の継承権もほとんどない第三王子として、嫌がらせで送られた辺境で、思いがけず一時の安らぎを得ただけ。あの大きな猫と、木の香りがする家。



女を武器にすり寄る令嬢も、裏で何を企んでいるか分からない奴等もいない。

思わずほっと息をつくと、ライルが顔をしかめていた。

「どうした、ライル」

「……いいえ、なんでもありません」

どう見ても何もない顔ではなかったが、いまだヒナの家の余韻に浸っていたかった俺はそれ以上何も言わなかった。

――次の日、そんな自分に後悔することになるとも知らず。

＊　＊　＊

「ふんふ～ん♪　あ～、よっこいせっと♪　……え」

鼻歌交じりで畑の作業をしていると、わさっと茂みが動いて、見たことのない男性が飛び出してきた。ヴァイスと同じ格好をしているので騎士団の人なのは分かるけど……なんで？

思わず硬直していると彼が慌てて、身体についた葉っぱを払って言った。

「あ、すまない。驚かせたようだ」

それに落ちかけた眼鏡の位置を直している。ええと、これはもしかして。

「……騎士団の方、ですか？」

「ええ。たい……ヴァイスさ……殿から、聞いて」

ううん微妙な言い方。ヴァイスさんとはどういう関係なんだろう。今まで他の騎士が来ることはなかったのに。

しかも、鼻歌を聞かれてしまった。それに、「よっこいせ」とか言っちゃったし！

とりあえず敵対する意思はないことを示すために、ぎこちなくお辞儀をする。

「ヒナ、です」

「ライルと言います」

ピシッとした礼、真面目そうな声。よく見ると、この世界で初めての眼鏡だ！

私にお辞儀をするとライルさんはちらっと周囲を見回した。

「畑を見せていただいても？」

「あ、ええ、どうぞ」

畑を見にきたのか？　いや、それならこの家に来るまでの道すがらにもある。まぁ、いいか。見られて困るような物もないし。周囲をつぶさに調べていた彼をしばし放置して、私はいつものように縁側でお茶を淹れることにした。

「あのー、よかったらお茶でも」

「ありがとうございます……つっ……」

すると思ったより素直にライルさんが縁側に腰かけた。それから眼鏡を取り、眉間をグニグニと揉む。あれ。

「もしかして、頭が痛いんですか？」



「え、ああ、失礼。最近目が疲れて」

分かる！　私も、一日中パソコンとにらめっこした日は頭痛が酷かった。これは、なんとかしてあげなければ！　治癒魔法を使う手もあるけど、魔法はなるべく使わないようにしているから……

とりあえずリビングに置いてある巨大クッションを持ってくると、ライルさんを持ち上げてそれに乗せた。

「な!?　ちょっ！」

「大丈夫。任せて」

ふっふっふ、魔法は使わなくても社会人スキルを舐めないでほしい。タオルを水で濡らし、少し熱いくらいに温める。そしてそれを、ライルさんの目の上に乗せた。ホットアイマスクだ。

「お、おい！」

慌てたように騒ぐライルさんの手を取り、ハンドマッサージを始める。最初は起き上がろうとしていたライルさんも、諦めたように身体の力を抜いた。左手が終わり、右手をやり始めてしばらくすると、寝息が聞こえてきた。かなりお疲れだったみたいだ。

御簾を半分下ろし、日陰を作る。そして、お腹にタオルケットをかぶせた。

そろそろお昼ご飯の用意でもするか。ホットドッグにしようかなぁ。

キャベツのような野菜を刻み、パンととっておきのミトの実を焼く。ミトの実というのは、ゲーム内で栽培していた野菜の一種だ。それを、ソーセージの形に成形したものを使う。

パリッと皮目が焼けて、ジューシーな肉汁が滴り出した頃、いい匂いがしたのかもぞもぞとライ

ルさんがクッションの上で動くのが見えた。
「ちょうどよかった。お昼ご飯作ったんで、食べませんか？」
「な……」
周りを見回しているライルさんにそっとテーブルを示す。
テーブルの上には、パンにソーセージと野菜炒めを挟んだホットドッグもどきが置いてある。
それを見たライルさんがぱちぱちと瞬きをして言った。
「すまない。いただこう」
「それはよかった！　おかわりもあるので、遠慮なく言ってくださいね」
そう言って、私もホットドッグを手に取る。ケチャップもどきの赤いソースは程よい酸味が利いていて野菜も甘い。そして、このソーセージ、もといミトの実！　肉のはずだが、重たくない。大成功と言っていいんじゃないだろうか？
「あ……」
考えながら食べていたら、お皿の上が空になっていた。
ちらっとライルさんを見ると、同じくお皿が空になっている。
「はい、追加です」
「……ありがとう」
結局、三皿も食べてしまった。食後のお茶を出すと、ライルさんがこちらを見ておずおずと聞いた。
「その……このソーセージ、私が今まで食べた中で一番だった。なんの肉か聞いてもいいだろうか？」
あれだけ食べたのに、腹具合は丁度良い。なんとも不思議なお肉だ。
このお肉に目をつけるとはなかなかだな、と思いつつ答える。
「ああ、あれは、ミトの実を荒めにすりつぶした物を」
するとライルさんの眼鏡越しの目がきゅうっと丸くなった。
「ミ……ミト？　今、ミトと言ったか？」
「はい。ああ、これですね」
取り出したのは、つるんとした桃色の、瓜のような実だ。これを成形するとハンバーグにでもソーセージにでもなる優れもの……なんだけど。
「まさか……そんな……」
「え？　あ、もしかして嫌いでした!?」
「好きとか、嫌いとかの問題ではない！　この実はあまりの美味さに乱獲され、数百年前に絶滅したと言われるミトの実！　今や文献にしか載ってないんだぞ！」
えっ。
「そ、そうなんですか？　でも……」
「何？　まさかまだあるとか言わないよな？」
「いやぁ、今はないんですけど……栽培中で」

「さ、栽培……」
もふもふの手でそっと後ろを指し示す。畑の隅には手にある物の縮小版が鈴生りになっている。
その光景を見て、ライルさんがふらあっと後ろに倒れ込んだ。
「あ～、やっぱりかぁ……こっちでは珍しいかもと思ったけど、絶滅したとはねぇ」
出荷するつもりはなかったからいいんだけど。
ゲーム内で牧場を経営している人もいたけど、私は畑を極めたかった。だからミトの実をお肉の代わりとして育てていたのだ。説明では、肉より美味しくて体力の回復量も肉より多かったはず。
当時はゲームだから味は分からなかったけど。食べてみたらかなり美味しかった。
――そして、今はないと言ったのは嘘だ。アイテムバッグに、あと数百個は入っている。
「ライルさん、ライルさ～ん」
「う、ん……は！　う、夢じゃなかったのか……」
あ、しまった。ミトの実、テーブルの上に置きっぱなしだった。ライルさんががっくりと音がしそうな勢いで畳に突っ伏す。
「そ、そんな、そんな物食べさせて、いったいどうする気だ！」
「いや、お腹が空いているかなぁと思って……」
「そんな気軽に食べる物じゃないんだ！　そんな伝説級の物、俺にどうやって支払いをさせる気だったんだ！　もう……この身を売るしか」
「いやいやいや！　いりません！　代金なんていらないですからね!?」



ええええ!?　突然覚悟を決めた顔をし始めたライルさんをストップストップと手で制すが、彼の眼はいつの間にか据わっていた。
「いらない……いらない？　俺の身体じゃ不服か？」
「え？」
何か、話が行っちゃいけない方に行っている気がする。
「これでも、副隊長を任されている。身体には自信がある」
あっ脱ぎ始めた!?　ちょ、誰か止めて！
「あ、あの、落ちちゅ、落ち着いて！」
そうして、シャツを開けたライルさんに押し倒されかけた時、天の声が聞こえた。
「ライル、何をやっているんだ？」
「ああ、ヴァイスさん！　助けてぇ！」
「……まったく、何をやっているかと思えば」
「申し訳ございません」
ヴァイスさんの訪れによって騒動は一旦収まった。私は三人分のお茶を用意してそっと座っている。私の上から引っぺがされたライルさんも我に返って、やっと落ち着いてくれた。
今はお説教の時間なのだけれど……ヴァイスさんがくるりとこちらを向いて顔をしかめた。
「それで、これがその実か」
「はい」

テーブルの上には、ミトの実が一つ載ったままだ。
ヴァイスさんが深いため息をついた。
「ヒナ。君はなぜこの実と種を持っている」
「なぜ、と言われても……」
ゲームの中で手に入れました、とはいえない。
「質問を変えよう。君はこれをどうする気だ」
「普通に食べますけど」
「売る気は？」
「特にありません」
ヴァイスさんの質問に首を振る。自給自足用に植えたし、この世界での肉と言えば魔物の肉なのだとメルさんが教えてくれた。
ただでさえ目立つこの見た目で、さらに目立つようなことはしたくない。
そう言うとヴァイスさんの表情が少し和らいだ。
「それを聞いて安心した。このことを知る者は？」
「いません」
「では、これからも他言無用に。ライルも分かったね」
「言えませんよ、こんなこと……」
ライルさんがクッションに沈み込む。さっきまで怒られてしょんぼりしていたくせに、と思いながら私は手を挙げた。
「育てるな、とは言わないんですね」
問題をなくすには、その原因を絶つのが最善だ。最悪、育てている木をなくしてしまえぐらいのことは言われるかもと思っていたんだけど。
するとヴァイスさんは顎に手を置き、悩ましげに言った。
「それは、まぁ……これがミトの実だと分かる者が圧倒的に少ないからだ。鑑定持ちか、あるいは学者か賢者ぐらいだろう。ならば、こんなに美味しい……もとい、貴重な物をなくしてしまう方が罪というもの」
ちなみにヴァイスさんにも同じホットドッグを出しました。湯呑でお茶を飲む姿も、すっかり見慣れてしまった。ふう、と息をつきヴァイスさんがこちらを見る。
「それにしても、このお茶はいつ飲んでも美味しい。まさか、この茶葉も絶滅した木の葉だったりしてな」
「ま、まさかぁ！」
思わず声が上擦ったが、なんとかそう答える。
あ、危ない。実は世界樹の葉ですとはいえない！
称号「豪農」を手に入れた時、世界樹の種をゲットしたのだ。畑に植えて品種改良を重ね、最も美味しいお茶の葉が採れるようになった。茶畑を作ろうと思って、アイテムバッグに枝を数十本入れておいたし、現在すでに三本畑に植えてある。お茶用に加工した葉っぱは、数キロある。

――でもジト目で見ないで！
「……エへ？」
必殺！　まんまるお目目の首斜め四十五度！　これで落ちない人間は……眉間のしわが増えただとぉ！
ううう……色々聞かれるかなあと肩を縮めていると、ヴァイスさんがまた細く長い息を吐いた。
「まぁ、いい。絶対に誰にも言うな」
「はい！」
それから二人は帰っていった。それを見送って、畳に寝転がる。
「やっぱり、森の中にいた方がよかったかもなぁ」
この村の雰囲気は好きだし、人だって優しい。この村が大好きだ。
だけど、こういったことが今後もあるかもしれない。ポーチの中に入っている種や苗を思い出してみるが、さっきの反応を見るに、どれもこれも出してはいけない気がする。
もしこれらを育てられることが分かれば最悪、村に迷惑がかかるかもしれない。
「う～ん……」
人目がなければ、使える物も増える。……でも。
「キャルちゃん、泣くだろうなぁ」
ごろん、ともう一度畳で転がる。それからその日は悶々としながら過ごし、そのまま眠った。

次の日、いつものように畑の世話をしていると、ヴァイスさんがやって来た。
「今日、盗賊団の討伐に行く」
「そっか。気を付けてね」
「ああ」
何か言いたそうにするヴァイスさんに首を傾げたが、ヴァイスさんは何も言わなかった。
「いってらっしゃい」
手を振ると、驚いた顔をされた。え、何？　こっちの世界では言わないの？　そんなわけないか。
「ああ、行ってくる」
ヴァイスさんは照れ臭そうに笑うと、踵を返した。なんだよ、言うんじゃん。
「よし、吹っ切れた！」
両手を上げて伸びをして、畑仕事に戻った。

しばらく作業をしてそろそろお昼ご飯の時間。ちょっと飲んじゃおうかなぁ。
「ん？」
ガサリ、と草が揺れる音がした。動物か？
「あぁ？　でかい猫？　魔獣か？」
現れたのは、人だった。薄汚れた格好で、下卑た笑みを浮かべる男に顔をしかめる。
「魔獣なら近くにテイマーがいるか。そいつを殺して、お前を売っぱらってやるよ！」

こちらが言語を理解出来ていないとでも思っているのか、男は一人でぺらぺら話している。同時に男の手に、火の球が現れた。この世界の人が魔法を使うのを、初めて見た！
いや、感動している場合じゃないな。もしかして、あの盗賊団の残党？
「この辺りのもん燃やしたら、お前の主（あるじ）は出てくるか？」
火がトマトに近付く。私のトマトに手だしさせるかってんだ！
「とう！」
魔法には魔法を！　水の球を作り、男に向かって投げた。
「ぶあっ!?　くそ！　魔獣のくせに！」
それに重ねるように、ジャンピング猫キック！
「はっ！　そんなもん、当たるかっ！」
しかし男が意外と早く避けたので、空中でくるりと回転。回し蹴りをお見舞いした。
「食べ物を粗末にする奴は、地獄の業火に焼かれてしまえ！」
地面に倒れた男の腹を踏み、火の球を出す。先程男が出したものよりも、数倍大きいやつだ。もちろん、野菜には傷一つ付けません。
「ひっ！」
「ありゃ、気絶しちゃった」
まぁ、いいか。縄で縛り上げて、完成。
「他には……」



スキル『探索』を使うと、画面が宙に現れた。そこには、周辺の地図が表示されている。
真ん中の点は自分だとして、すぐ隣にある赤い点がこの男。散らばっている青いのは村人だろうな。ゲームの時には疑問にも思わなかったが、どういう原理なんだろう？
そんなことを考えていたら、画面に青い点が沢山現れた。村に向かってきているから、恐らくヴァイスさん達だ。さっき盗賊退治に向かったばかりだったから、もしかしてこいつがいないことに気がついたのかも。
「待っているのもあれだし、持って行こう」
男を小脇に抱え、村へと歩き出す。坂を下って行くと、数人がこちらに向かって走って来た。
「ヒナ！　盗賊団のリーダーがこちらに来るかもしれない！　今、村の皆を……」
私の抱えている物を見て、ヴァイスさんが固まった。
「え？　ああ、突然出てきて畑を焼こうとしたもんで、ちょっと捕まえてみた」
「ちょっと捕まえてみたって……間違いないな」
ヴァイスさんが男の顔を見て頷いた。
「盗賊団のリーダーだ」
「あらまぁ。……じゃあ、はい」
これが？　リーダー？　弱かったけど。えーっという顔で見ると、ヴァイスさんも物言いたげに口をもにょもにょ動かしている。男をヴァイスさんに手渡そうとしたら、微妙な顔で見られた。
「お前なぁ……盗賊団のリーダーを『あげる』みたいなノリで渡すな！」

「だって、いらないし」
持って帰れとか言われても困る。どうするの？　と首を傾げると、ヴァイスさんが長い溜息をついて、捕縛された男を受け取ってくれた。
「……分かった。ご助力、感謝する」
無事、引き渡し終了。その夜は村を挙げての宴会となった。リーダー以外の男はきっちり騎士団たちが捕らえたそうだから、もうこの村に危険はない。これで騎士団――ヴァイスさんたちもいずれ帰っていくだろう。
村人達が踊っているのを見ながら飲んでいると、今日の主賓がやって来た。
「おい、顔が怪しいぞ」
「失礼な。この蜂蜜酒が美味しいから、他にも美味しいのを作れないかと思ってただけなのに」
やっぱり、自然豊かなところだからかな？　アイテムバッグにもビールのストックは少ないし、向こうの世界のお酒を手に入れる方法とかないかなぁ？　無理だろうなぁ。
やっぱり、造るか。確か、お酒を造る魔道具があったはずだし。
色々と考えているとヴァイスさんの眉間のしわが濃くなった。
「顔が怪しい」
「ちょ、さっきからレディに向かって失礼ですよ」
「待て。……レディ？　ちょっと待て。お前女なのか!?」
私の言葉に呆気にとられるような表情をするヴァイスさん。え、まさか本当に？



「はぁ!?　どこからどう見ても、女でしょうよ！　薄桃色の柔らかい毛並み！　クルンとつぶらな瞳！　プニプニの肉球！」
「いや、最後のは関係ないだろう……？」
ええええ、本当に女だと思われてなかった？　思わず頭を抱えてしゃがみこむと、ヴァイスさんがオロオロとこっちに近づいてきた。
「その……すまない」
「まぁ、いいよ。それに、このフワフワボディだと、ちょっと判りづらいかもしれないしね」
おうとつ、ほぼないしね。だから仕方ないとは分かっているんだけど！　と横を見ると、予想以上にヴァイスさんが肩を落としている。
「え、どうしたの？　気にしてないよ？」
「その……友人だと……」
なるほど。気の許せる友人が出来たと思っていたら、女だったと。うーん。
「男女の友情も、有りでしょう」
「そうなのか？」
この場合、恋愛方面に行かなそうだし。人間と獣人は有りなんだろうけど、私、でっかい猫だし。相手は美青年。美青年と巨大猫。ことわざにもならなそうだ。
男だからって全女性が恋愛対象になることはないし、逆も然り。変態とか犯罪者は別だけど。
異性だろうが同性だろうが、友情と恋情の境目はあやふやなようで、意外とハッキリしている。

そもそも恋愛にはならないでしょう？　と言って蜂蜜酒が入った木製コップを掲げる。
「そう、だな」
するとヴァイスさんも持っていたコップを掲げた。コツンッとコップ同士をぶつける。
飲み干すと、甘い蜂蜜の香りとともに喉がぽっと熱くなる。ヴァイスさん……ええい、もうヴァイスでいい。ヴァイスもゆっくりとコップを乾すと、気取った手つきでこちらに手を差し出した。
「では、友情の証に一曲いかがですか？」
「ええ、踊れないよ？」
「大丈夫だ。そこはリードしよう」
「足を踏んでも、怒らないなら」
「善処しよう」
なんだか二人とも酔っぱらっているのかもしれない。差し出されたヴァイスの手を取り、広場の中央に進む。
「しかし、改めてデカいな。痛っ」
「おっと失礼、つい」
踏んでやった。まぁ、私の方が背高いからしょうがないけど。
「よくあることです、よ！」
「ふっ……甘いな」
踏もうとしてきたので、避けてやった。

それから攻防を繰り返し、宴の夜は更けていった。

○とある密談1（ヴァイス視点）

「ヴァイスよ。遠征、ご苦労であったな」
「はっ」
「ここは私の私室だ。そうかしこまらなくてもいい」
この国を統べる国王陛下であり、俺の父が苦笑しつつ言う。俺は礼を言いながら立ち上がった。
それを見て頷くと、陛下はわずかに首を傾げた。
「それで、どうした？　遠征の報告なら先程受けたが」
「……先ほどの内容とは別にご報告がございます。クレイト村で猫と出会いました」
「猫？」
「種族は獣人らしいのですが、その……見た目が大きな猫なのです。実は、先の盗賊団のリーダーを捕まえたのは、彼女でして」
そもそも一般的な獣人は、人間の姿に獣の耳や尻尾など一部の特徴だけが発現するのが一般的だ。
ヒナのように全身がもふもふの獣姿――それも、二足歩行する猫の姿など初めて見た。
そう言うと、陛下は楽しそうに眼をきらめかせた。

「詳しく聞こうか」
村に着いてからのことを細かく説明すると、陛下が笑いだした。声を上げて笑う姿を見たのは、初めてかもしれない。
「なんとも面白い猫だ。それで？　物はあるのか？」
「はい、こちらに」
帰還するときに、ヒナに「お土産」として渡された物。ミトの実。あれだけ隠すようにと言っておいたのに、ポンと渡してきた。だから、陛下に見せていいとは限らないが……許してほしい。
陛下はそれを矯めつ眇めつしながら、口元を緩めた。
「ふむ……確かに、本物だろうな。しかし、お前が言う猫の出身であるヒノモトにも、もはやミトの実はないはずだが、いったい、何処で手に入れたのか。まぁ、それはいい。問題は……伝説の代物が、国境沿いの辺境、小さな村で生産されていることだ」
本来であれば世界的な発見になる。国で管理するのが正しい、と陛下は考えているのだろう。
「友人と言っていたが、飼い慣らせるか？」
「それは、難しいかと。一日もかからずに単独で家を建て、魔法と魔力は宮廷魔術師以上。獣人の身体能力に加え、盗賊団のリーダーを無傷で捕まえられる程の戦闘も出来るとなると……」
「しかも、お前の容姿に魅せられることもない、か。見目のよい獣人の男では？」
「それは、なんとも……」
ヒナのような獣人は見たことがない。はたして、見目のよい普通の獣人で、どうにかなるだろう

か？　それにそんなことを国王の命令とはいえ、友人相手にやりたくはない。
「魔法、戦闘、そして生産。どれを取っても、国外に出すのは愚策だろうなぁ。しかし無理強いをすれば、逃げられそうだ」
彼女なら、やるだろう。あの村を気に入っている様子だが、迷惑になると分かれば跡形もなく消えそうだ。
「はい。本人は静かに暮らしたいと言っておりましたので」
「余計なことはしない方がよいかもしれないな。それでミトの実は美味しかったかい？」
「……はい、とても」
「よし、行くぞ！　やはり最初はステーキか、それとも」
「え、あの、父上？　父上！」
陛下が立ち上がり、手を打って人を呼ぼうとする。
そうだった！　立太子する前の陛下は、己の好奇心の赴くままに各地へ赴き、三年もの間行方不明になった方だった！　早速シェフを呼ぼうとする陛下に俺は駆け寄った。
「ま、待ってください、父上！」
すまない、ヒナ。
他言無用と言いながら、一番知らせてはいけない人に話してしまったかもしれない！



立ち読みサンプル
はここまで

## ○王様と私

「へっくしょい！　うう、誰か噂でもしてるのかな」
私は鍬を畑に振り下ろしつつ、頭を振った。もうすぐ、夏が来ます。夏野菜の季節！
「トマトに、キュウリ、スイカ……ふふふふふ」
収穫が待ち遠しい、んだけど……
さっきから私の頭の後ろに何か視線が突き刺さっているのを感じるのだ。それに、十日ほど前にこの村を出て行ったはずのヴァイスくんの気配までする。
「ええっと、どちら様で？」
そう思いつつ振り向くと、一人の男性が茂みの中から現れた。
壮年の男性だが、金髪を後ろでまとめた髪型が似合っていて、体格もがっちりとしている。村ではあまり見たことがないタイプだ。
「ふむ、気が付いていたか。私の名はガイナフォロス」
「ガイナ……何だって？」
「ガイと呼んでくれ！」
「はぁ。ヒナ、です」